

調査員に思う

2月25日、下館市統計調査員大会が松岡市長はじめ関係者多数出席のもとで開催された。大会は盛大に進行して、表彰を受ける者、それを拍手で祝う者、ともどもに喜びを分かち合ったのである。大会に出席した私たちにとって、直接調査員に接し盃を交えながらその労苦のほどを談笑のなかで話し合うときほど、統計という仕事が本当に大変だと思ふのである。

社会機構は複雑多岐にわたり、人心も他を省りみる暇のないほど多忙な生活のなかで、統計事務を円滑に推進する起動的役割りを果たするのが調査員であろう。というものの、調査員の仕事ほど割のあわないものもない、損得を意識していたら調査員など引受ける人はおるまい。

現在のところ、県内に明確な調査員の登録制度を採用している市町村はない。しかしときおり郡市部において調査員確保の困難性が散見されるのである。ということは、都市化といわれる機構変革は、人間のもつ社会倫理をも変えてゆくものなのであろうか。人は孤高のなかに安住し、外部からの交渉を拒否する。己れの権利は人一倍主張するが、その義務を履行しようとはしない。そんな時代になつているのである。職場においても計算には電算機が登場し、家庭にあつては料理に電子レンジが利用されてはいるが、眼を調査員に転じてみると、あいも変わらず一枚一枚調査票を回収するのに昨日も今日も砂ボコリをあげて駈回らなければならない。

統計機構も機械化と、需要の拡大にともない、その範囲はますます複雑精巧にわたるけれども、調査員の仕事そのものは依然として2本の足にその力を借りなければならないのである。

2月(FEBRUARY)はラテン語のFEBREARIUSからとつたもので、浄みの月を意味する。そして、この月の10日に罪を浄める祭事を行なつたことに起因するという。私たち統計事務の一旦をになう者も、謙虚に身を浄めて、苛酷な諸条件のもとで活動しなければならない統計調査員の立場を理解し再考する必要を痛感するのである。このことは統計の精度向上にも連なることだからである。

県統計協会には、こうした統計調査員のうち、勇退されてゆく功績のあつた方々に統計協会総裁から感謝状が授与される制度があり、長くその業績を讃えるわけであるが、昭和44年度はその数238名に及んでいる。しかし、この方々は例えば農業センサスの調査員6,370名をとつてみても僅かに3.74%にすぎない。

なお、これを市郡別にみても、この制度を有効に利用しているところと、そうでないところがあるのである。折角こうした制度があるのであるから、各市町村当局においてもこの制度を活用し、統計機構の底辺に、静かに活躍する多くの調査員に対して、ささやかな銭としてほしいものである。

(県統計課 横須賀弘)